

伏木曾我

前

ツレ 大磯の虎

ワキ 従者

シテ 獵人

後

ツレ 前に同じ

シテ 曾我十郎祐成

地は 駿河

季は 五月

次第

「露と消えにし夏草の。く。茂みが原を尋ねん。

ッレ

「是は大磯の虎と申す女にて候。さても曾我の祐成
過ぎにし五月の末つかたに。富士の裾野にて討た
れ給ひぬ。妹脊の中とてなどやらん。唯かりそめ
の袖の移香。なれし涙も晴れやらぬ。雨もほどふ
る日数へて。七日々々の弔ひも。名残程なくはや
也ぬ。せめては彼兄弟の。果てにし跡を尋ね行き
て。一返の念仏をも申さんと。今日思ひ立つ旅衣。

歌

袖しをれ行く朝露に。野を分け山をこゆるぎの。
急ぐ心ぞあはれなる。

「別れし空は五月雨の。別れし空は五月雨の。古屋
の軒の忍草。かれぐなりし契りの。末はそこと
も白雲の。富士の裾野のかりくらの。跡はいづく
の程やらん。く。

ワキ詞

「御急ぎ候ふ程に。是は早富士の裾野井手の里にて
ありげに候。又あれより狩人の来り候。暫く御待

あつて。所のやうをも御尋ねあらうずるにて候。

シテサシ

「夕日西に絶え残つて。鳥の声かすかに。狩場の末もほのかなる。山は富士浦はおりたつ田子の海。

一声

「浮島が払ひかねたる草の露。

地

「しげみが原の狩衣。

シテ

「袂すゝしき気色かな。

ワキ詞

「いかに是なる狩人。富士の裾野井手の里とはいづくを申し候ふぞ。

シテ詞

「不思議やなさして人をも伴ひ給はで。此山中に分け入り給ふは。いかさま曾我の祐成に情深かりし。

大磯の虎御前にてましますな。

ツレ

「恥かしや何とて知しめしたるらん。此有様にてそれと名のらば。此世に亡き人までの。名も如何ならんつゝましや。

シテ

「いや包めども。袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙のおもて。

ツレ「袖のけしきも打ち煙る。

シテ「よそめ知らるゝ富士の嶺の。

ツレ「思ひ内にあれば。

地「色外にあらはれて。く。かくれなかりし祐成の。

その妻衣と菊の名の。曾我の人々の。御跡ならば
いたはしや。此方へ入らせ給へや。御道しるべ申
さん。

シテ詞「是こそ富士の裾野井手の里にて候へ。又是なる草

の少し見え候ふこそ。祐成兄弟の果て給ひたるし
るしの塚にて候へ。よくく御弔ひ候へ。

ツレ「過ぎにし五月の頃なれば。蓬薄のせうく生ひて。
いたくも繁らぬ所なれば。疑ふべきにもあらず。
我も同じ苔の下に埋もれなば。今更かゝる思ひは
せじ。火の中水の底なりとも。此世の中にしま
さば。などか言葉をかはさざらん。

地「黄泉いかなる所ぞや。一たび行きて歸らざる。中

有の別れにたへこがれ。悲しび給ふ有様は。よその見る目もいたはしや。げにや胸は富士。袖は清見が関なれや。煙も浪も立たぬ日も。なしとよみしも理や。かくて夕陽たえぐの。雪のけ富士おろしの。音もはやくれはとり。あやしき人と見えつるが。其まゝやがて祐成の。墓所に立ち寄り草むらの。露消えくとなりはてゝ。ゆくへも見えずなりにけり。く。(中人)

ツレ詞

「ふしぎや今の狩人の。かき消すやうになりたるぞや。

歌

「是に付けてもなつかしや。く。今宵はこゝに草莖。思ひを述ぶる面影の。添寐の枕片敷きて。夢の契りを待たうよ。く。

後シテ

「松陰の涼しき道はあるなるに。修羅の巷は物うかりけり。いかに虎御前。祐成こそ参りて候へ。

ツレ

「ふしぎやな草の枕も露の間の。まどろむ隙もなき

うちに。祐成の来り給ふぞや。あらふしぎの事や。

シテ「心ざしの至る時は山川万里も遠からず。ましてやこゝは亡き跡の。」

ツレ「うき身の露の置きどころの。」

シテ「神さへ鳴りてけうとけれども。」

ツレ「それにはよらじ妹脊の契りの。」

シテ「たま／＼あふ夜に。」

ツレ「鳴る神も。」

地

「思ふ中をばよも避けじ。たとひ野の末山の奥の。」

雲のはてなりとても。君と住まばもろこしの。虎

ふす野辺はなほ。草の枕もなつかしや。いつまで

も／＼。長かれかしと思ふ夜の。明け易き頃ぞ恨

みなる。

クリ地

「げにや輪廻の妄執の。業につたなき恋慕の思ひ。」

涙にくるゝ暗路のうちに。夢物語申すなり。

シテサシ

「むかし在原の業平此東路に下り。」

地「時知らぬ雪を。かのこまだらと詠ける。夏野の鹿
を取らんとて。富士の裾野に御出であり。

シテ「在鎌倉のともがらは申すにおよばず。

地「遠国遠里の人々まで。雲霞の如く棚引きて。浮島
が原の草も木も。靡き洩れたる方もなし。

クセ「我等野に伏し山に隠れ。敵の通路よそながら。見
る時もあれば思ひかくれども。猛勢なれば叶はず
して。過しくて年月を。故里の曾我に歸りては。

唯兄弟。泣くより外の事ぞなき。

シテ詞「かくて七日のかりくらし。名残の日にもなりしか
ば。あつぱれ敵の祐経に。逢はゞやと便隙を待つ
所に。男鹿二つ女鹿一つ。三頭つれて落ち来る。
射手も三騎其中に。大柏の水干に。

地「秋二毛の行騰に。烏黒なる馬に乗り。花やかなる
は誰やらんと。見れば敵の祐経なり。うれしき心
もそゞろぎて。鞭に鐙を揉み合はせ。物あひ近く

なりしかば。弓打ち上げて引かんとするに。不運の至りにや。伏木に馬を乗りかけて。屏風をかへしてかつぱところべば。弓手に下り立ちて。手綱にすがり馬を引つ立てゝ。又打ち乗りておくれを見れば。敵はしがきに隔たりて。まぶしの射手に馳せ加はつて。物あひ遙かにのびたりけり。弓折れ矢尽きてせん方もなく。日も既に呉竹の。其夜の夜半ばかりにや。井手の屋形に忍び入りて。や

すくゝと敵を討ち終る。本望遂げし身の。其まゝ土中の屍となつて。裾野の草に埋もれぬれども。名をば富士の嶺の。雲井にあげて。人のほまれは大磯の。虎のうそぶく松の風。虎の嘯く松風や。富士おろしに。夢はさめてぞ明けにける。